

2. 丹沢山周辺におけるタンザワイケマの分布拡大とそれに伴う ホソリンゴカミキリとジウジナガカメムシの進出

高桑正敏¹⁾

Expansive Occurrence of a Longicorn Beetle *Oberea nigriventris* Bates and a Lygaeid Bug *Tropidothorax cruciger* (Motschulsky) Caused by Expansion of *Cynanchum caudatum* (Miq.) Maxim. var. *tanzawamontanum* Kigawa in/near Tanzawa Mountain, Central Japan

Masatoshi Takakuwa

要約

丹沢山地における植生環境の急激な変化は、そこでの構成種にさまざまな影響を与えてきていると推測される。その典型例として、タンザワイケマの分布拡大状況とともに、それを寄主植物とするホソリンゴカミキリとジウジナガカメムシの主稜部への進出状況を調査した。調査地は東丹沢堂平駐車場～太礼ノ頭～丹沢山～塔ノ岳に至る調査道・登山道沿いとした。タンザワイケマは、丹沢山～塔ノ岳間では大群落も各所に見られることから、かなり以前から本種の進出があったものと考えられる。一方、堂平～丹沢山間では生育は不連続であり、とくに太礼ノ頭～丹沢山間では大きな群落はないうえに生育も局地的なので、かなり最近になってから進出したものと推定される。ホソリンゴカミキリは、堂平～太礼ノ頭～瀬戸沢ノ頭においてほぼ連続的に確認されたが、丹沢山～塔ノ岳間ではまったく発見できなかった。タンザワイケマの最近の進出に伴い堂平方面から瀬戸沢ノ頭まで到達したが、それより丹沢山にかけてはブナ林が比較的良好に残されているために、タンザワイケマとともに本種も進出が困難な状態にあると考えられる。ジウジナガカメムシは、ホソリンゴカミキリとは対照的に、多少とも不連続ながら丹沢山～塔ノ岳間において確認されたが、堂平～太礼ノ頭～瀬戸沢ノ頭ではまったく発見できなかった。本種はごく最近になって丹沢山～塔ノ岳間に進出した可能性が強い。丹沢山近くにおいてチャバネツヤハムシがタンザワイケマ葉上より発見された。本種の動向についても注意しておくべきと思われる。

(1) はじめに

植生環境に急激な変化が生じている丹沢山地においては、特定のごく少数の植物が分布域を拡大あるいは繁茂しつつあるが、それに伴って特定の昆虫も分布域を拡大しつつある可能性が考えられる。そこで調査が容易かつ確実な例として、主稜部で顕著に分布域を拡大したと考えられるタンザワイケマとそれを寄主植物とするホソリンゴカミキリを対象に、両者の現在における分布態を調査することとした。また両者の関係を調査する中で、ジウジナガカメムシもタンザワイケマに密接に関係して主稜部に新たに進出したことが判明したので、その状況も併せて調べることにした。さらに、わずか1例にすぎないが、タンザワイケマも寄主植物とすると推定されるチャバネツヤハムシについても簡単にふれておく。

(2) タンザワイケマとその進出の理由

タンザワイケマ *Cynanchum caudatum* (Miq.) Maxim. var. *tanzawamontanum* Kigawa (ガガイモ科) は、もともと崩壊地の縁辺など明るい立地に生育するフロンティア植物であり、フォッサマグナ要素の1つとしても知られている。本来、森林に覆われた丹沢山地では生育可能な場所も限られていて、1960年以前には白ヶ岳(城川, 1989)や津久井町原小屋・幽神・世附(以上イケマとして記録; 林ほか, 1961)などで記録されていたにすぎなかったが、1980年頃までには主峰部の蛭ヶ岳や丹沢山・塔ノ岳(以上城川, 1989)でも記録されるようになった。現在では各地で生育を見るようになり、とくに塔ノ岳～丹沢山～蛭ヶ岳にかけて

の主稜部ではほとんど連続的に大小の群落を形成するに至っている。

このように本種が近年になって主稜部に進出、あるいは勢力を拡大するに至った理由は容易に推定できる。第一に、かつて鬱蒼としていた樹林が次々と枯死し、あるいは衰退したことである。1960年代後半になって大山南面でのモミ枯れ現象が指摘されるようになったのを皮切りに、1970年頃から自然林の衰退が取り沙汰されるようになり、1990年代に入って稜線部のブナ林が急激に衰退・枯死するようになった(星ほか, 1997)。この間、主稜部における尾根部では草地化が進行するとともに、樹林内にあってもギャップが増加したはずである。日の当たる明るい環境を好むタンザワイケマにとっては、稜線部や樹林内ギャップに進出する条件が整ったことであろう。さらには、ヤマボウシやナ群集などの林床を覆い尽くしていたスズタケが1990年頃に一斉枯れ現象を起こしたばかりか、次に述べるようにその後の復活もごく一部にとどまっている。すでにギャップが各所に生じていたことであり、タンザワイケマにとってはそれまでほとんど入り込めなかった環境であったにもかかわらず、ここでも進出できる絶好の空間を生じたわけである。

これに加えて、高地へと追いやられたニホンジカの影響もきわめて大きかったであろう。その採餌圧によって多くの植物の繁茂や植生の遷移が妨げられることになり、結果的にタンザワイケマの繁栄を促すことになったからである。たとえば、主稜部の多くではミヤマクマザサが密生しており、本来はその群落の中で萌芽・成長することはきわめて困難と考えられるが、シカの採餌圧によって丈が非常に低く抑えられた群落が生じたため、タンザワイケマは萌芽してササの群落上に広がるのが可能となった。また、スズタケは一斉枯れの後もシカの採餌圧を受けて回復に至らないばかりか、

1) 神奈川県立生命の星・地球博物館

地上に萌芽した大多数の植物種も採餌圧を受けたために、マルバダケブキやホソエノアザミなどニホンジカが忌避する一部の植物が林床植生を形成するか、樹陰の濃い立地では裸地化するようになった。

タンザワイケマはフロンティアであるとともにシカが忌避する植物である。このため、他種の林床植物との競争にも優位に立ち、樹林内にあってもギャップを生じれば容易に発芽・成長できるチャンスを得たことであろう。以上のようにして、タンザワイケマは現在見るように主稜部の各地に数多く進出するに至ったと推定される。

(3) 丹沢におけるホソリンゴカミキリ

ホソリンゴカミキリ（別名：ホソツツリンゴカミキリ）*Oberea nigriventris* Bates（カミキリムシ科）は本州以南に広く分布し、一般にはイケマ属植物だけを寄主植物とすることが知られている（註1）。神奈川県では津久井地方から丹沢山地、箱根火山にかけて局地的に記録されており、丹沢山地では比較的最近になってから西丹沢三国峠（平野、1996）、同じく白石沢（高桑、2004a）、東丹沢堂平・天王寺尾根・太礼ノ頭（太礼ノ頭）（以上露木ほか、1997）で記録された。成虫は盛夏の頃に発生してタンザワイケマの蔓上とくに先端近くに静止して蔓部分をかじり（後食活動）、また近くと低くゆっくりと飛ぶ習性があるので、姿の確認は難しい。さらに成虫の姿が見られない場合であっても、タンザワイケマに残された独特な後食痕（図3）を調べることで、そこに生息していたかどうかを確認できる。

丹沢山地におけるこれまでの記録のうち、少なくとも東丹沢の堂平と太礼ノ頭においては最近になってから、つまりスズタケが一斉枯死してから分布を広げてきた可能性が高い。と言うのも、それらの場所はかつてブナ主体の鬱蒼とした樹林が広がり、かつ林床のほとんどは背の高いスズタケが密生していたために、寄主植物であるタンザワイケマが分布していた可能性はきわめて低いからである（註2）。以上の仮説が正しければ、タンザワイケマの進出に伴い、ホソリンゴカミキリもまたその後を追うように分布を拡大していくことが考えられる。このため、今回の丹沢大山総合調査において本種の詳細な分布状況を調査した。

註1. ナシという記録も戦前に複数あるが、明らかに他のカミキリムシの同定誤りと判断される。また、高桑（2004b）は津久井地方の低標高地においてオニドコロ（ヤマノイモ科）の蔓を後食していた可能性を指摘している。

註2. 東丹沢のもう1地点である天王寺尾根への進出が最近のことであるかどうかは判断が難しい。ここには大崩と呼ばれる崩落地があり、もともとタンザワイケマがその縁辺で生育していた可能性があるからである。

(4) 丹沢におけるジュウジナガカメムシ

ジュウジナガカメムシ *Tropidothorax cruciger* (Motschulsky)（ナガカメムシ科）は体長10mm強とやや小型だが、赤くめだつ色彩のために前種よりもむしろ確認が容易である。本種の生態については、筆者は十分な知識を持ち合わせていないが、友国監修（1993）によれば「ガガイモ、イケマ、カモメヅルなどのガガイモ科植物に寄生し、群生することが多い」とされる。神奈川県ではこれまで

丹沢山地の秦野市水無川・清川村宮ヶ瀬（鈴木、1981；林・尾崎、2004）の2ヶ所の記録しか見あたらない（秦野市では1968年、宮ヶ瀬では1972年の採集記録）。丹沢山地にはガガイモ科植物は何種か分布しているが、いずれも陽地に生育するうえに主稜部ではタンザワイケマ1種しか分布が知られていない（福留、2001からの判断）ことから、かつては主稜部に分布していなかったことはほぼ確実である。

(5) 調査方法

調査地を東丹沢堂平駐車場～太礼ノ頭～丹沢山～塔ノ岳に至る調査道・登山道沿いとす。堂平の調査道分岐点～太礼ノ頭の間は緩やかな地形が広がっているため調査道から離れた場所もできるだけ調査対象としたが、太礼ノ頭～丹沢山～塔ノ岳の間は丹沢山頂付近を除けば急峻な地形であるために登山道（ほぼ稜線部）近くに限らざるを得なかった。2005年7月に予備調査を行い、タンザワイケマとホソリンゴカミキリの分布の概略を把握するとともに、後種の分布限界と考えられた地点ではできるだけ綿密に調査した。2006年には8月2～3日に再度予備調査を行ったうえで8月5～6日に本調査を行った（丹沢大山国定公園特別保護地区内調査許可：神奈川県指令緑政第718号）。

本調査は次のようにして行った。

タンザワイケマについては原則として、花または蕾をつけている株・群落だけを対象とし、それぞれのまとまりのある地点ごとに見た感じの株数、下層植生を形成している優占種、空間の状況（ギャップの有無・程度）などを記録するとともに、GPSを用いて緯度・経度と標高などの情報を保存した。花または蕾をつけている個体に限ったのは、それならば花・蕾の色彩から発見が容易であって確認漏れが少ないこと、逆に幼株も対象とすると発見が困難なケースも多々あるためデータが不正確になること、さらにホソリンゴカミキリは予備調査によって幼株をあまり利用していないことが判明したことによる。

ホソリンゴカミキリについては、まずタンザワイケマの株・群落に慎重に近づいて成虫を目視することに努め、次に株を静かに揺らして飛び出す個体があるかどうかを調べ、確認できた合計数を記録した。1個体も確認できなかった場合は、本種の後食痕の有無を調べ、それが明らかな場合は記録した。

ジュウジナガカメムシについては2005年にすでにタンザワイケマの葉上にその姿を認めていたが、確認した個体数が少なかったこともあり、固有な寄主植物という認識をもっていなかった。しかし、2006年の予備調査の際には多くの姿を認め、しかもタンザワイケマに限ってそのカメムシが発見されることに気づいたので、生息調査を行うことにした。本種は、ホソリンゴカミキリと異なり生活痕は明らかでないため、その株・群落での生息確認は幼虫あるいは成虫の直接確認によるしかなかった。

GPSで得た位置情報は、神奈川県立生命の星・地球博物館の新井田学芸員に依頼してテキストの一覧表を作成するとともに、2万5千分の1地形図を約1万5千分の1に拡大した地図上にタンザワイケマの確認ポイントと、そこでホソリンゴカミキリとジュウジナガカメムシの生息確認の有無状態を落とした図を作成した。



図 1. タンザイケマ群落



図 4. タンザイケマ葉上のジュウジナガカメムシ



図 2. タンザイケマを後食するホソリンゴカミキリ



図 3. タンザイケマに残されたホソリンゴカミキリの独特な後食痕

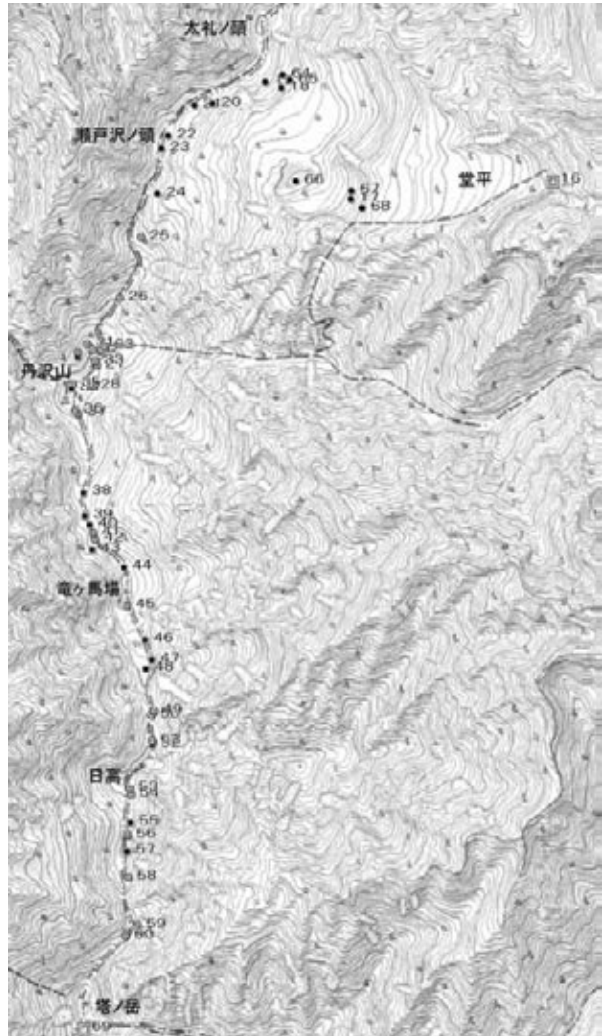


図 5. タンザイケマとホソリンゴカミキリ, ジュウジナガカメムシの確認地点 (この地図は, 国土地理院発行の数値地図 25000 (地図画像)「大山」を利用して作成した)

- : ホソリンゴカミキリの生息が確認されたタンザイケマ生育地点
- : ジュウジナガカメムシの生息が確認されたタンザイケマ生育地点
- ◎ : ホソリンゴカミキリ, ジュウジナガカメムシともに確認されなかったタンザイケマ生育地点

表 1. タンザワイケマ生育地点とその概況

No.	標高m	緯度	経度	イケマ株数	カミキリ	カメムシ	樹林環境	林床の優占種
16	907	N352841.940	E1391108.580					
17	1152	N352839.720	E1391038.820	約4~5株	●2頭	未確認	ブナ林ギャップ	マルバダケブキ
18	1285	N352853.040	E1391028.560	多数; 10×20m	●5頭	未確認	ブナ林ギャップ	ホソエノアザミ+イケマ
19	1297	N352853.700	E1391026.280	約4株	●3頭	未確認	ブナ林やや広いギャップ	ホソエノアザミ
20	1342	N352851.120	E1391018.420	1株	●1頭	未確認	ブナ林ギャップ	ホソエノアザミ
21	1356	N352851.000	E1391015.780	約3株+幼株多	●2頭	未確認	ブナ林やや広いギャップ	ホソエノアザミ+キク科
22	1371	N352847.280	E1391011.880	約4株(小株)	●食痕	未確認	ブナ林ギャップ	キク科
23	1372	N352845.720	E1391010.920	1株	●1頭	未確認	ブナ林小さなギャップ	キク科+マルバダケブキ
24	1379	N352840.380	E1391010.260	2株+幼株	●食痕	未確認	ブナ林ギャップ	キク科
25	1433	N352835.160	E1391007.860	1株(小株)	未確認	未確認	ブナ林ギャップの縁	キク科+ホソエノアザミ
26	1490	N352828.020	E1391004.680	1株	未確認	未確認	ブナ林ギャップの縁	マルバダケブキ
27	1542	N352819.920	E1391001.260	1株	未確認	未確認	夏緑林の疎林	キク科
28	1565	N352817.520	E1391000.600	1株	未確認	未確認	夏緑林の疎林	キク科
29	1539	N352820.940	E1390958.440	2株(大きな株)	未確認	■数頭	草地	キク科
30	1527	N352821.540	E1390958.560	2株	未確認	未確認	草地	キク科
31	1538	N352822.500	E1390959.880	1株	未確認	未確認	草地	キク科
32	1514	N352821.720	E1391000.720	多数; 10×15m	未確認	未確認	草地; 夏緑林の疎林	マルバダケブキ
33	1555	N352820.400	E1391001.140	1株(大きな株)	未確認	未確認	草地; 夏緑林の疎林	マルバダケブキ
34	1566	N352817.160	E1390957.600	1株	未確認	■多数	山頂の開放空間	イネ科
35	1557	N352817.700	E1390957.720	2株	未確認	未確認	夏緑林の広いギャップ	キク科+マルバダケブキ
36	1563	N352814.580	E1390958.020	1株(大きな株)	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ミヤマクマザサ
37	1552	N352814.160	E1390958.500	2株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ミヤマクマザサ
38	1498	N352804.740	E1390959.340	多数; 10×10m	未確認	■多数	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ+イケマ
39	1491	N352801.980	E1390959.520	約3株	未確認	■少数	尾根の広いギャップ	ミヤマクマザサ
40	1485	N352800.900	E1391000.180	約4株	未確認	■少数	尾根の広いギャップ	ミヤマクマザサ
41	1474	N352800.000	E1391000.840	1株(大きな株)	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ミヤマクマザサ
42	1471	N352759.280	E1391001.140	約6株	未確認	未確認	夏緑林広いギャップ	ミヤマクマザサ
43	1483	N352757.960	E1391000.600	多数; 15×15m	未確認	■多数	夏緑林の疎林; ギャップ	ミヤマクマザサ+ホソエノアザミ
44	1503	N352755.860	E1391005.340	約3株	未確認	■多数	夏緑林の疎林	ミヤマクマザサ
45	1503	N352751.240	E1391005.820	1株	未確認	未確認	ヒノキ植林ギャップ	ミヤマクマザサ
46	1464	N352747.280	E1391008.400	約3株	未確認	■少数	ニシキウツギ林ギャップ	ミヤマクマザサ
47	1457	N352744.820	E1391009.420	約5株+幼株多	未確認	■少数	夏緑林ギャップ	ミヤマクマザサ
48	1454	N352743.800	E1391008.520	多数; 10×10m	未確認	■少数	ブナ林広いギャップ	ホソエノアザミ
49	1427	N352738.700	E1391009.840	約4株	未確認	未確認	夏緑林の林縁	ミヤマクマザサ
50	1434	N352738.280	E1391009.420	1株	未確認	未確認	夏緑林の林縁	ミヤマクマザサ
51	1453	N352735.100	E1391009.600	1株	未確認	■少数	夏緑林の林縁	ミヤマクマザサ
52	1453	N352734.680	E1391009.540	多数; 10×15m	未確認	■少数	夏緑林の広いギャップ	ミヤマクマザサ+ホソエノアザミ
53	1458	N352729.520	E1391006.180	約3株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ+イネ科
54	1445	N352728.740	E1391006.420	約6株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ
55	1430	N352725.380	E1391006.240	約7~8株	未確認	■幼虫	夏緑林広いギャップ	ホソエノアザミ+イネ科
56	1420	N352723.880	E1391005.880	約3株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ+イネ科
57	1437	N352722.020	E1391005.760	約4株	未確認	■少数	夏緑林広いギャップ	ホソエノアザミ
58	1432	N352718.900	E1391005.940	約3株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ+イネ科
59	1415	N352713.140	E1391007.380	1株+幼株	未確認	未確認	夏緑林の疎林	ホソエノアザミ
60	1418	N352711.880	E1391005.640	1株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ミヤマクマザサ
61	1406	N352712.240	E1391005.760	約3株+幼株	未確認	未確認	夏緑林ギャップ	ホソエノアザミ+イネ科
62	1442	N352735.160	E1391009.480	1株	未確認	未確認	夏緑林の疎林	ミヤマクマザサ
63	1579	N352822.260	E1391002.640	1株	未確認	未確認	ブナ林広いギャップ	マルバダケブキ
64	1296	N352854.540	E1391028.800	約7~8株	●4頭	未確認	ブナ林ギャップ	マルバダケブキ
65	1273	N352853.880	E1391029.820	約5~6株	●4頭	未確認	ブナ林ギャップ	マルバダケブキ
66	1203	N352841.880	E1391030.780	約2株	●3頭	未確認	ブナ林ギャップ	マルバダケブキ
67	1117	N352840.740	E1391038.940	多数; 10×10m	●3頭	未確認	ブナ林ギャップ	マツカゼソウ+ホソエノアザミ
68	1068	N352838.700	E1391040.560	2株(幼株)	●食痕	未確認	ブナ林ギャップ	ホソエノアザミ
69	1469	N352700.940	E1390959.340					

(6) 結果と考察

A. タンザワイケマの分布状況

堂平駐車場～丹沢山：堂平駐車場（標高 907m）から天王寺尾根への登山道との分岐点までは、1 株の生育も認めることができなかった。この間はヒノキやスギなどの針葉樹が林冠を覆っていてギャップが少ないうえに、林床にはテンニンソウやオオバアサガラなどが密生していて本種の

生育には不適と考えられる。分岐点から太礼ノ頭の肩に至る調査道はブナやシオジなどのみごとな夏緑樹林となっているが、かつて林床を一面に被覆していたスズタケはまったく姿を消してしまい、現在では林床植生はきわめて貧弱で、大部分でマルバダケブキが低密度に生育し、また下部でマツカゼソウ、上部でホソエノアザミが群生する程度にすぎない。ここではギャップが小数点在しており、下部で 4

地点（うちもつとも低標高の No.68 地点（標高 1068m）では幼株群落）、太礼ノ頭（標高 1352m）の肩に取り付く急傾斜面で大小の群落（計 4 地点）を認めた。太礼ノ頭から丹沢山山頂手前にかけてはブナを主体とした夏緑樹林となっていて、一部を除けば比較的健全な状態を保っている。ここでは各所に植生保護柵が設置され、柵内では林床植生の回復が著しいものの、柵外ではホソエノアザミやキク科の 1 種（シロヨメナ?）、ミヤマクマザサなどが部分的に優占するにすぎない。いずれのタンザワイケマ群落も小規模なことから、おそらくごく最近になってから進出を果たしたと推定され、稜線部あるいは多少とも東側に下りた斜面に点在する程度であった。なお、西側斜面では幼株をわずかに確認できたにすぎず、また瀬戸沢ノ頭（標高 1375m）より先では 3 地点しか生育が認められなかった。

丹沢山山頂部：丹沢山（標高 1567m）山頂部では北面と南面を調査した。北面はなだらかな地形が広がるとともに、森林の後退が著しく、疎林状態もしくは草地状態となってミヤマクマザサやマルバダケブキなどが旺盛に生育し、各所で大小の群落が認められた。これに対し、南面では登山道沿いは森林が残されているためか、ギャップの広がる 2 地点においてしか確認できなかった。

丹沢山～塔ノ岳：とくに西面で森林の衰退が著しく、稜線部も大部分で疎林状態あるいはギャップか草地となっており、ほぼ連続してタンザワイケマの大小の群落が認められた。林床はミヤマクマザサに密度濃く一面に覆われている場所も多いが、しばしばそこでもタンザワイケマの生育を見る。ただ例外的に、塔ノ岳北東斜面は森林が登山道を覆っているためか、1 株も発見できなかった。なお、予備調査では日高付近の西側斜面において広大なホソエノアザミ群落中に多数のタンザワイケマを認めているが、ホソリンゴカミキリの成虫も後食痕もまったく認められなかったことで、本調査は行わなかった。

以上の結果からも明らかなように、本種はブナなどの夏緑樹あるいはヒノキやスギなどの針葉樹林が林冠を覆っている場所では、ほとんど生育を見ない。しかし、森林が衰退してギャップが生じるとそこに進出し、空間が広がった場所ではやがて大群落を形成するに至るらしい。丹沢山頂部あるいは丹沢山～塔ノ岳間では大群落も各所に見られることから、これら稜線部ではかなり以前から本種の進出があったものと考えられる。これに対し、堂平駐車場～丹沢山間、とくに太礼ノ頭～丹沢山間では大きな群落は認められず、かつ生育も局地的なので、かなり最近になってから進出したものと推定される。

B. ホソリンゴカミキリの分布状況

堂平から太礼ノ頭を経て瀬戸沢ノ頭のすぐ上部の No.24 地点までは、調査したすべてのタンザワイケマ群落から成虫あるいはその後食痕が確認された（後食痕だけで成虫が未発見であったのは No.68, 22, 24 地点だけ）。とくに堂平と太礼ノ頭付近では成虫も比較的多く見られた。その一方では、No.25 地点からは丹沢山を経て塔ノ岳に至るすべての地点で、成虫も後食痕もまったく確認できなかった。No.24 地点と No.25 地点とは直線距離にしてわずか 170m 程度しか離れていないが、両地点を境にして劇的に分布の有無が分かれていることはきわめて興味深い。

以上の結果からは、本種はタンザワイケマの進出に伴い、

（低標高地域から進出して来て？）最近になって太礼ノ頭～瀬戸沢ノ頭に到達した可能性が高い。一方で、瀬戸沢ノ頭より丹沢山にかけてはブナ林が比較的良く残されているためにギャップもほとんどなく、タンザワイケマも本種も進出が困難な状態にあると考えられる。また、堂平～太礼ノ頭～丹沢山はほとんどのギャップが面積的に比較的狭いのに対し、丹沢山～塔ノ岳間は草地あるいは広いギャップが多いという環境差があるので、それが本種の後地域への進出を遅らせている可能性もあろう。ただし、後地域には樹林に囲まれた狭いギャップも少なからず認められること、堂平の No.66 地点はかなり広いギャップであるが本種が確認されたこと、津久井における発生地（高桑, 2004b）も同様であるが個体数が多いことから、それほど重視すべき環境差ではないと判断される。

C. ジュウジナガカメムシの分布状況

堂平から太礼ノ頭を経て丹沢山山頂手前までは、まったく発見できなかった。また、丹沢山山頂部ではタンザワイケマ群落がほとんど連続的に広く分布しているにもかかわらず、2 地点においてしか確認できなかった。これに対し、丹沢山～塔ノ岳間では No.38 地点から No.57 地点まで多少とも局地的ながら、ほぼ連続して発見された。なお、2005 年の予備調査の際と比較すると、はるかに多くの地点から発見されたが、2005 年のときは本種を意識して探していたわけではないので、この 1 年で分布域を拡大したのか、あるいは個体数を増加させたのかどうかはわからない。

いずれにしても、丹沢山山頂部での確認例が少なかったこと、ならびに丹沢山から太礼ノ頭方面では未確認だったことから、本種はごく最近になって丹沢山～塔ノ岳間に進出した可能性が高い（註 3）。一般にカメムシ類は上昇気流に乗って山頂部や稜線部に飛来する習性があることから、おそらく低標高地域からの飛来個体に基づくのであろう。また、丹沢山～塔ノ岳間は草地あるいは広いギャップが多い一方で、丹沢山～太礼ノ頭方面は比較的狭いギャップしかないという環境差があるので、それが本種の後地域への進出を妨げている可能性もある。今後の動向に注目したい。

註 3. 本種は、今回の丹沢大山総合調査において西丹沢の桧洞丸（標高 1600m）でも 1 頭が採集されている。その間での調査がなされていないので結論が出せないが、あるいは桧洞丸や丹沢山地最高峰の蛭ヶ岳（標高 1672m）など丹沢山よりも西方の地域からの進出である可能性もないわけではない。

D. チャバネツヤハムシの記録

丹沢山～竜ヶ馬場間の No.38 地点において、チャバネツヤハムシ *Phygasia fulvipennis* (Baly)（ハムシ科）1 個体がタンザワイケマ葉上より発見された。本種はこれまでガガイモ（ガガイモ科）を寄主植物とすることが知られており、神奈川県内では低地に広く普通に分布していたものの、丹沢山地でも西（1997）によって丹沢山から初めて発見された。今回の発見はそれに次ぐものであるが、1 個体にすぎないうえ、実際にタンザワイケマを寄主植物としているかどうか確認できていないことから、これ以上の論評は避けたい。しかし、その動向については注意しておくべきと思われるので、ここにあえて書き留めておいた。

謝 辞

本調査は丹沢大山総合調査の一環で行われたが、併せて平成 18 年 7 月 27 日付け神奈川県指令緑政第 718 号による丹沢大山国定公園特別保護地区内の調査・採集許可を得てなされたものであり、許可を得るに当たっては神奈川県自然環境保全センターの岩崎和男所長と夏莉 正氏にお骨折りをいただいた。また、現地調査やデータ処理については、神奈川県昆虫談話会幹事の中村進一氏と藤田 裕氏、神奈川県立生命の星・地球博物館新井田秀一学芸員と昆虫ボランティアの加賀玲子氏に協力をいただいた。さらに、神奈川県立生命の星・地球博物館勝山輝男学芸員と田中徳久学芸員からはタンザワイケマはじめ植物に関するさまざまな情報を授かった。これらの方々には厚くお礼を申し上げたい。

文 献

- 福留正明, 2001. ガガイモ科. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌 2001, pp.1137-1144. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 林 正美・尾崎光彦, 2004. カメムシ目 (異翅亜目・頸吻亜目). 神奈川県昆虫誌 1, pp.213-272. 神奈川県昆虫談話会, 小田原.
- 林 彌栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林業試験場研究報告, (133): 1-128, 16pls.
- 平野幸彦, 1996. 脇一郎氏採集の丹沢産カミキリ 3 種. 神奈川県虫報, (113): 6.
- 星 直斗・山本詠子・吉川菊葉・川村美岐・持田幸良・遠山三樹夫, 1997. 丹沢山地の自然林. 神奈川県公園協会・丹沢大山自然環境総合調査企画委員会編, 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp.175-257. 神奈川県環境部.
- 城川四郎, 1989. 神奈川県産植物の 2 新変種, 1 新品種について. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (18): 11-22.
- 西 泰弘, 1997. 丹沢山地東部甲虫類調査. 動植物研究会会報, (27): 233-255.
- 鈴木 裕, 1981. 神奈川県の異翅半翅類. 神奈川県昆虫調査報告書, pp.189-213. 神奈川県教育委員会.
- 高桑正敏, 2004a. 表紙写真解説～イケマの汁を吸う? ホソリンゴカミキリ～. 神奈川県虫報, (146): i.
- 高桑正敏, 2004b. 神奈川県津久井地方におけるホソリンゴカミキリ. 甲虫ニュース, (147): 17-18.
- 友国雅章監修, 1993. 日本原色カメムシ図鑑. 381pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 露木繁雄・木下富夫・高桑正敏, 1997. カミキリムシ類. 神奈川県公園協会・丹沢大山自然環境総合調査企画委員会編, 丹沢大山自然環境総合調査報告書 丹沢山地動植物目録, pp.227-242. 神奈川県環境部.